



# 体験指導マニュアル

## 平草履の作り方 (六合世立流)



この体験指導マニュアルは、2013年2月27日に中之条町入山地区の「よつてがねえ館（六合村ふるさと活性化センター）」にて、世立集落の山本ウラ様をはじめとした地元の方々に平草履づくりを教わった時の内容を記録したものです。

六合村の伝統工芸品としては「こんこんぞうり」と呼ばれる、スリッパ型の草履が全国的に名が通っています。しかし、「こんこんぞうり」を編み上げるのは素人では一日作業になってしまうので、今回、当協会ですべて講習会を行うにあたり、半日で仕上げることができる「平草履」を取り組みました。しかし、六合村でつくる平草履ですから、ワラを布で包んだ“編みワラ”を使って編みます。“編みワラ”草履は、あったかくて丈夫、作る際に藁が落ちなく仕事も早い、しかもお好みの柄でお洒落にできるし、履いた感触も気持ちが良い…と、根強い人気があります。

しかし、体験指導者としては、六合村の草履にまつわる歴史的背景を理解しておく必要がありますので、「六合の文化を守る会」の山本茂先生が仰られていた内容を基に、以下に六合村の草履に関する記事を記載いたします。体験指導の際にお役立てください。

---

元々、標高が高く寒冷地である六合村入山地区では、稲作は行われておらず、ワラの代わりにスゲを使用していました。スゲは草履、縄、ムシロ等で常に使うので、しめ縄や炭俵の縄など、冬の間は特に使う仕事がありました。スゲは付近の山でも採れましたが、まとまった量が必要なので、30年～40年前までは、入山じゅうで野反湖まで行ってスゲ（イワスゲ、タバスゲ）刈りに行っていたそうです。1996年10月発行の「六合の民俗」（著：六合村の文化を守る会）によると、夏が終わって暇ができた頃、夕食後に各地区から人が集まり、夜道を一路野反池（野反湖が出来る前は池と湿原だった）目指して、背負子に二食分の食料をつけ、三里の道を歩いたそうです。夜明け前の4時頃に野反池の池尻に到着し、一面の岩菅を刈り取りました。昼飯を食べて間もなく、刈り取った岩菅を背に家路につきますが、富士見峠下の「大なら」と呼ばれる場所まで降りて来た頃には力の限界か来ます。ちょうどその頃、示し合わせた家の者（老人や、学校が終わった子供）が迎えに来て、背負子の荷を分けて家まで降りたそうです。岩菅刈りの大仕事は、三日続きました。

十日夜（旧暦のとうかんや：11月中旬頃）の餅つきの後、村中総出で花敷川原（花敷温泉あるいは尻焼温泉）で「ねどづくり」が行われました。湯が湧く川原を掘り上げ、「さぎっちょ」という砂の俵を積んで川の水を防ぎ、胸まである「ねど」を作りました。こうして掘った「ねど」に、岩菅を1週間～10日間漬けて、しなを良く（柔軟に）しました。これを「ねどふみ」といいます。途中で岩菅の束をひっくり返したり、干したり、入れ替えたりで、「ねどふみ」は12月から3月までひっきりなしに行われました。俵あみやムシロ織りは毎日毎晩続き、草履、靴、みのなども作られました。現在、「ねどふみ」は根広のわずかの方が行っているのみとなりました。

尻焼温泉、花敷温泉が観光客で賑わいだしたのは昭和40年代に入ってからのこと。それまでは川床の温泉は地元の人しか知りませんでした。「ねどふみ」の後は老若男女そろって温泉に浸かり、そこで若い男女は出会い、品定めされ夜這いの上、夫婦となることもあったとか。

「ねどふみ」は、熱湯を踏む、熱床を踏む、といったものが語源だと考えられています。

また、六合村に全くワラがなかったのかというと、そうではなかったようです。実際に、山本ウラさんが40年前にお嫁に来た頃、今の家には水田が3枚ありました。しかし、収穫したお米を炊いても数ヶ月分にしかならず、また味もあまり良くなかったために、割に合わなく2～3年でやめてしまいました。近所には自宅で食べる一年分のお米が採れていた家もありましたが、20年位前にはみんなやめてしまったそうです。そんなことで、世立の方々はずっとワラで草履を編んできました。稲作をやめても知り合いからトラックなどで大量に貰ったり、買ったりして、やっぱりワラを使い続けてきました。しかも、世立では、スゲだけで編んだものは亡くなった人に持たせてやるもので、柩の中に入れるもののうちの一つです。だから、スゲだけで編んだものは使いませんし売れません。こんこんぞうりで使うにしても必ず布で包んで編みます。一方、引沼の山本茂先生は、付近では「おかぼ」という、水を張らないで作る、出来も味も悪い米しかできなかったと仰られています。なので、スゲはとても重要でしたし、「亡くなった人のためのもの」という考え方は存在しません。この、スゲに対しての考え方が引沼集落と全く違うところですよ。もしかしたら、世立と引沼はその境界線なのかもしれません。

文責 赤木道紘

## 「わしはこんこんぞうりと言うもんだ」 (文:山本 茂)

わしは、上州吾妻郡の山奥、上信越高原国立公園の麓、自然と温泉の豊かな六合村という小さな村で生まれた。

わしを作っているのは、入山に生まれ、入山で育った六十過ぎのおんばあが、畑仕事や山仕事が終わる冬の間である。

囲炉裏を囲んで、昔を語りながら作る。

わしは、わらむしろの敷かれた、土間のある家に良く合う。

わしをはいてくれる人は、健康になる。

そのわけは、稲わらと布で作られたやわらかさと弾力性が足の裏をほど良く刺激し、血の巡りを良くする。

また、やわらかくて弾力性があるわらは、足の裏にぴったり合って大変はき良い。

また、夏はさわやかで冬あたたかい。

わしの名前のいわれは、作る時にコンコンとたたきながら形をととのえ、目をつめるからといわれたり、冬、雪がコンコンと降る中ではいたので「こんこんぞうり」と言う人もいます。

まあ、だまされたと思って、わしをはいてみてくだあれ。



《事前準備》

- ・広い会場（作業場所で一人1畳以上必要）
- ・ブルーシート（掃除が楽なように）
- ・編み台（一人一台ずつ）
- ・座布団（座りっぱなしで足が痛くなる）
- ・編みワラ  
（ワラ2・3本に95cm × 4cmの布を巻いたもの）

《材料》

- ・編みワラ 24本（内4本は鼻緒で使う）
- ・PPロープ（直径0.8cm × 200cm） × 2本
- ・麻ひも 40cm × 2本

《その他の道具》

- ・（わっぱさみ）竹で指す道具

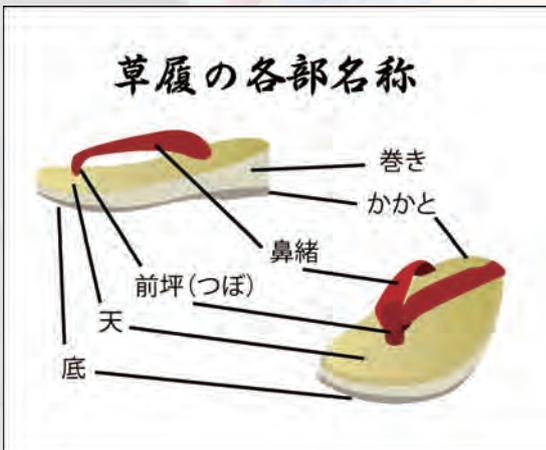
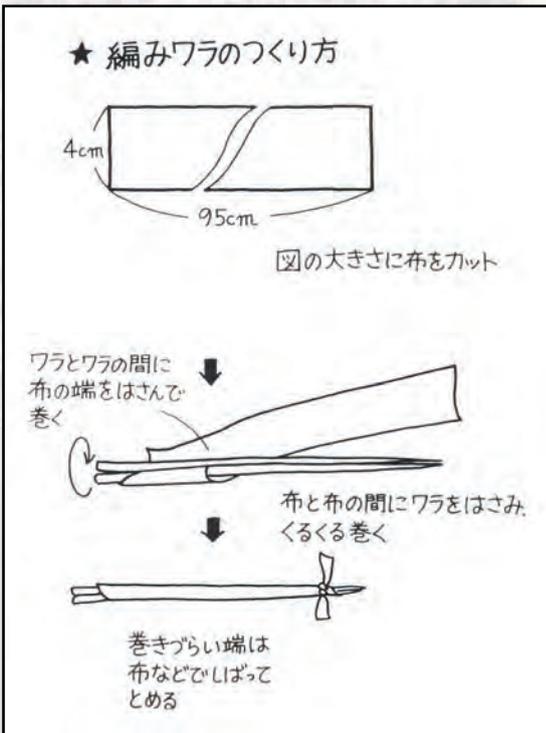
《体験指導の手順》

会場の準備ができれば、編み台と材料を参加者の人数分をセットします。

お客様（参加者）が入場します。

席に着いてもらったら、今回は六合村世立の作り方で平草履を編むので、大雑把にでも國村の紹介や、「スゲ」と「ねどふみ」、「こんこんぞうり」にまつわる話ができると、地域体験らしさが強まり、また参加者も地域の風を感じるようになります。

材料がきちんと揃っているかを確認します。編みワラを編む作業は、半日プログラムでは時間が足りなく体験できません。また、編みワラの色や柄は各自選びたいところですが、参加者が初めての場合、特に大人数の教育旅行での対応となると、その余裕はありません。自分ひとりで作れるようになってから、好きな色や柄でお洒落をしていただきましょう。





まず、PP ロープの両先端をひと結びします。ロープを半分に折り、さらに捻って8の字をつくります。



8の字の交差点で折り返して、



編み台に引っ掛けます。



編み台にロープがかかりました。この4本並んだロープが「芯縄」となります。これをベースに草履を編んでいきます。



端が 15cm くらい出るように、編みワラを芯縄の輪に入れ、下から 3 回巻きます。



巻いた編みワラの先端を輪の中心に向かって立てて、4 本ある芯縄の中央 2 本と一緒にまとめて、長い方の編みワラを上から押さえます。



押さえた編みワラをそのまま左の芯縄の下をくぐらせ、



締めながら編みワラを上を折ります。



長い編みワラを中央2本の芯縄の後ろを通し、右の芯縄の上に出します。この時に、短い編みワラの先端を中央2本の芯縄の間に挟めます。



右に出した編みワラを芯縄に巻きつけ、中央2本の上を通し、



左の芯縄との間の下を通し、くると上に回します。この時、真ん中に現れた編みワラの横線は2本になっています。



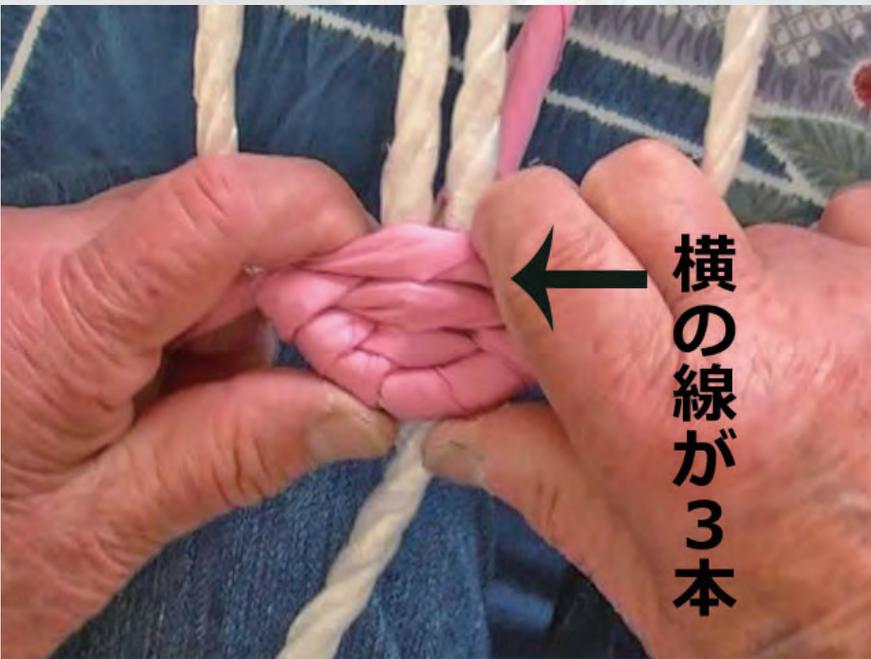
編みワラを、中央2本の芯縄の後ろを通して、右の芯縄の上に出します。



真ん中に出ている短い編みワラを、中央2本の後ろを通した長い編みワラの下（後ろ）に出します。



ギュッと締めて、横に広げて。左芯縄の上に出た編みワラを後ろにまわして、



中央2本の上を通すと、横の線が3本できます。ここから、編み方が変わります。



人差し指、中指、薬指を芯縄の間に入れて、4本で編んで行きます。左の芯縄の後ろ側から手前に回し、



芯縄に対し交互に編んで行きます。



折り返して、次々に編んで行きます。



編みワラが終わったら、真ん中の隙間に新しい編みワラを入れて、少し重ねる感じで継ぎ足します。中途半端な長さ、芯縄の端の方で無くなった場合を説明します。まず、布を止めていたテープをとって、外側の芯縄にまわします。次の芯縄にかけられなかった場合は、その位置で、しっかり押さえておきます。



こういう場合も、やはり真ん中から継ぎ足します。イメージとしては「重ねる」感じではなく、「足らず」状態で進めていきます。



折り返して端まで来ました。先ほど足りなかった部分の編みワラをしっかり押さえながら、その上に次の編みワラを重ねていきます。編み込む際、ワラを張りすぎると横幅が短くなってしまいますので注意します。逆に、長さを決める手前方向にはしっかり押さえながら重ねていくようにします。



鼻緒をつくります。2本の編みワラを片膝で押さえて、左縄（右手を手前に引いてなう）をないます。



つま先から約3cmのところまでV字をつくり、まず片方を編み込んでいきます。



芯縄の外側から3本まで編み込んだら、もう一方の編みワラを編み込みます。



両方できたら、新しい編みワラを真ん中から入れます。左から右に編んで終わっていたので、次は右に編んで行きます。



端まで来たら、鼻緒の上（内側）から鼻緒をひと巻きします。



芯繩に編んでいって、もう一方の端まで来たら、やはり鼻緒の上、内側からひと巻きします。



鼻緒はキツく締めること。芯繩に折り返して、通常の編み方で続けます。



最後は、芯縄を外側から2本まとめて上から編みます。



芯縄を引っ張ります。手前にあった芯縄（PP ロープ）を編み台に引っ掛け片足で抑え、両手で手前に引っ張ります。



形が整ったところで芯縄（PP ロープ）を草鞋から5～6cm位のところで切り、裏返して底に突き出した余分な編みワラを切ります。



表にして、さらに形を整えます。余分な編みワラがはみ出ている場合はハサミ等で突っつき、中に押し込みます。



次に、鼻緒を留める前坪部分を作ります。前坪部にわっぱさみを刺して、



麻ひもを通します。



麻ひもの輪にPPロープ（芯縄）2本を入れて、強く締めてとめます。



麻ひもを左縄でない、約2cmの長さにして鼻緒を跨いでまわします。



鼻緒を折り返して底に行く麻ひもをないます。鼻緒をねじって、わっぱさみを通して止めます。



もう一度、麻ひもを左縄でなで、わっぱさみを天→底に通します。この時、一本手前の編みワラに通します。一本手前の編みワラがあまりにも粗末な場合は、もう一本手前にします。



麻紐を挟んで、わっぱさみを突き通します。前坪の長さを調整して、



底裏でしっかりと本結びします。余分な芯縄（PP ロープ）、麻ひもを切って、



六合流・平草履のできあがり～ 大変よくできました、おみごとです！



最後の編み込みで、芯縄を外側から2本まとめて編まなかった方の直し方をお見せします。竹で作った道具「わっぱさみ」の先端を編みたいところに刺し、もう一方、二つに割った部分に編みワラを挟めて、



先端方面に引っ張ります。少し出た編みワラを手で引っ張れば、しっかりと通ります。